

染色技術者の心得

著者は昭和14年から昭和57年まで大島紬技術指導センター（旧大島染色指導所）において業者の委託染色作業をおこなって来た経験から申しますが、大島紬は一仕切16反加工するので、高価な紬原料を加工している訳であるから、これに相応する高度な技術が必要である。

このようになるには、染色学やテキスト、さらには先輩の意見も吸収し、技術の改善向上を計りながら作業することである。往々にして技術者は自分の技術が正しいとほかの人の言うことを聞き入れず、自分よがわりで押し通すとか、自分の失態を認めることなく、人のセイにすることも良くないことであり、又、実地と合ってなく、最高の出来上がりでもないのに口先だけで言うことも又良くないことである。したがって、作業に当っては自分の技術がどの水準にあるかを考え、時には出来上がった紬を見て機屋の意見を聞き、検討、反省し、技術の改善向上をはかるのが技術者だと思う。

1例を記すと、機屋からもう少し赤味がほしいと言われたら、これで上等だと追返すのではなく、素直に直すことが大切であり、又、これ以上良好に出来上がるよう、緋の状態や緋締めが強弱を調べ、染料、助剤、温度、染色の操作、又泥染にあっては糊抜きや染液及び泥田でのもみ染を替え従来の1 + 1 = 2の作業でなく、その緋に適応した出来上がりの作業をなし、紬の検査合格はもとよりであるが、消費者に喜ばれる紬を生産することが大島紬加工に携わる者の責務だと思います。